

無涯塾創立十周年記念「無涯塾^{ものふ}の武士」

序

私が「無涯塾」の設立準備を始めたのは 2000 年 2 月であった。

3~4 人の会員で、県営富山武道館と岩瀬地区センターで試行しながら準備を進め、それから 1 年経って、**2001 年 2 月、「無涯塾」が正式に発足した。**

2 月に拘ったのは日本刀の裏名に、「如月＝旧暦二月」が多いことからきている。

刀匠が寒中に身を清め、白装束を纏い神仏に祈り、邪気をはらって打ち上げる日本刀は、日本古来の文化の象徴であり、武士の魂である。

因って、「無涯塾」を鍛え、将来、日本刀にみる威厳や威信あるものにしたいとの願望から寒さの最も厳しい 2 月を選んだのである。

発足当時から会員諸氏には、「社会人としての心構え」について幾度も話をしてきたことであるが、今、「無涯塾」に籍を置いて居合道を習う人達に充分通用すると思ひ、創立十周年を機に改めて筆を執った次第である。

私の信条が、「**素晴らしい剣士であるまえに常識ある一般社会人たれ**」であるので、そのことを基に、「無涯塾の武士」と題して、所信を述べてみたいと思う。

無涯塾命名の由来

今更命名の由来を述べることは先のブログと重複するので心苦しいが容赦願いたい。

設立準備当初には、「剣友会」とか、「剣親会」などの名が上がったが、私は平成 4 年 11 月、七段合格の砌から、会を発足させたら名称を、「無涯塾」にすると決めていた。

それは、**居合に対する私の想いを会の名称に込めようと熟慮した末のことである。**無涯の意味するところは、無限とか果てが無いといったことである。

居合は、四百五十年あまり前、出羽ノ国の林崎甚助重信公によって編み出され、今日に至るまで幾多の人が関わり工夫を凝らし、伝承されてきた。

恐れ多くも私は、居合道の真髓に少しでも近づきたいとの想いから、一生懸命稽古を重ね、武道に関する本を読み漁り、進んで先生方の教えを請うてきた。

だが、凡夫の自分には、例え生命を賭けても、居合の真髓に迫ることなど到底出来るものでないことは解っている。

しかし、出来ないと分かっている、果てのない所にあるそれを追い求め、努力する姿勢が貴い。所謂、貪欲な求道精神こそ最も大切と考え命名したのである。

即ち、「自力弁道・大悟」の精神から来たものである。「石ころは磨いても石ころ、それを悟るところに大悟がある。しかし、大悟（だいご）に居座ってはならない」、である。俗な言い方をすれば、『浜までは 海女が蓑着る 時雨かな』を、生涯貫くために。

最初、夢想神傳流居合道同好会「無涯塾」として発足させたが、今は同好会を外し、正式には、夢想神傳流居合道「無涯塾」である。

挨拶

このことは、『陣中に戯言<ざれごと>なし』のブログ中段でも少し述べたが、挨拶は、「無涯塾の武士」にとって大切なことのひとつである。

挨拶の「挨」という漢字は叩いて迫ると意味であり、「拶」は近づくということである。即ち、心を開いて相手に近づくことである。

自分が心を開かないで相手が心を開いてくれる筈がない。集団維持の為に欠かせないのが「挨拶」である。

たとえば、

自動車のエンジンは、ピストン・リングとシリンダーとの接触部分を滑らかにするためにエンジン・オイルを必要とし、オイルを切らすとエンジンは、忽ち焼き付き、停止してしまう。それと同じように「挨拶」というのは社会にとっての潤滑油である。

社会の一番小さな単位である二人以上の仲間との関係を円滑にする潤滑油（オイル）が「挨拶」なのです。こんな簡単なことが疎かになってはいないだろうか。猿社会にも毛繕<けずくろい>という猿仲間の挨拶がある。まして人間社会は挨拶抜きでは成立たないのである。こんな簡単な事が疎かになってはいないだろうか。

挨拶は互いに心を通わす智慧である。真心を込めた挨拶をしようではないか。挨拶は自らの心を言語や態度で表現する気配りである。黙<しつけ>も亦、無言の気配りであることを知っておこう。常識ある一般社会人たるために。

話を聴く

もうひとつ、「無涯塾の武士」にとって「真剣に話しを聴く」という大事がある。

話を真剣に聴くということは、話手と聞き手の間<ま>を詰めることである。

真剣に話を聴くと聴かないでは、その人の人生を左右する。

それには、

① 適度に頷<うなづく> ②話手を正視する ③相槌を打つ ④顔を耀かせ話を聞く
⑤疑問点を質する ⑥話手がのりに乗って話す雰囲気を作る ⑦目を耀かせて聞く
居合の講習会や日頃の稽古会において講師や先生、先輩の話にこのような態度で臨みたいものである。これが相手にたいする気遣いであり愛である。道場だけでなく一般の社会生活においても然りである。

話を真剣に聴けば話手の心の中や心情、訴えたい事もよく理解出来、話手と聞手の間隔が狭まり、そこに「和」の雰囲気醸し出され、互いの信頼関係が深まる。

居合も仮想相手との「距離の間<ま>」と、「時間の間<ま>」を考えて刀を抜かねばならない。そして「心の間<ま>」もであると、自分は考えている。

武士の気構

次に、「無涯塾の武士」の心構え・気構えについて述べよう。

剣に四つの戒<いましめ>がある。

① 驚=おどろき ② 懼<ぐ>=おそれ ③ 疑=うたがう ④ 惑=とまどう

武士は、剣の技や体力の練磨を通して精神も練り上げていた。

我々も、難局に直面したとき、冷静沈着な対応をするため、「驚・懼・疑・惑」に動じないようにしたいものである。要は、自分の弱い心との戦いなのである。

ストレスの多い現代社会に住む私達は、取越し苦勞という見えないものに驚き、懼れ、疑い、途惑って彷徨<さまよ>う。

「平常心」と簡単に口にはするが、体調や環境、一寸した人間関係により左右され揺れ動く弱いものである。昔の武士<ものふ>のように行かないだろうけれど、常日頃の気構えとして自分の中に大黒柱をしっかりと立てておきたいと願っている。

その為に私達は居合道を通して、心身を鍛え練り上げ、この「四戒」を超越、克服しようと精進している訳である。

「風吹ケドモ動ゼズ 天辺ノ月」・・・を目指して。

日本刀

冒頭に述べたが、私は日本刀に見る威厳や威信ある「無涯塾」にしたいと願っている。私の後、「無涯塾」を継いだ人達の努力によって何十年掛かろうともである。

日本刀は、剃刀のように鋭利で、柳の木の様に柔らかさを兼ね備え持つ神器である。世界に剣といわれる物は沢山あるが、鋭利で柔と軟を併せ持つ剣はない。そして誰が見ても<ぞくつ>とした美しさを感じるのである。

米国の剣友・Michael など、イリノイ州 KOBUDOUKAN の弟子達も日本刀には特別な想いがあるようで、我々日本人以上に刀に対し、神秘的な美を感じている。神秘的な刀は美しい。美しい刀はよく切れるのである。

彼等は感覚として、「美しい・即よく切れる」ということを、直感しているようだ。誰もがその美しさに神性を感じるようだ。

謂うならば、「無涯塾」を皆の力でキラリと光る集団にして欲しいと思っている。

日本刀は、古い鉄である昔の錠前や釘等と砂鉄を合わせ玉鋼にする。それに松炭で火を熾<おこ>し、ふいご（タタラ）を使って熱を加え、折り返し鍛錬を繰り返す、古い鉄と新しい鉄（砂鉄）をバランスよく結合させる。

何度も行われる折り返し鍛錬で玉鋼の中の不純物を弾き出すのである。

折れるのを防ぐ為、中心の芯鉄には柔軟な純鉄、外側を折れない為に硬い鋼で包む。焼をいれ、波紋が入り、砥師によって研がれ、ハバキ、縁金、柄、鐔、鞘と、拵が設えられる。沢山の行程に沢山の職人が携わり、やっと一振りの刀が出来上がるのである。

「無涯塾」も十年間、「折り返し鍛錬」を繰り返してきた。そこで不純物を弾き出して来た。十年の節目を迎え、漸く玉鋼の体をなして来たかのように思われる。あとは更に鍛錬を怠ってはならない。みんなが自から鍛えるため、折り返し鍛錬をすることで個々も強くなり無涯塾は更に進化し発展することであろう。

横道に逸れるが、刀がいかに鋭利で且つ柔軟なものか私の体験談を話そう。

私が真剣を使いだしたのは昭和 52 年 9 月（1977）、居合道三段になった頃である。真剣を持った嬉しさから何か物を切ってみたくてしょうがない気持が高まった翌年春の午後、氷見と石川県羽咋の境、三尾という地を通りかかったときのことである。道端の農家から田んぼに続く細い脇道に、直径三寸余りの孟宗竹<もうそうちく>が行く手を阻むように立っていた。

どの竹の先端にも竹の子のとき覆っていた斑模様の皮を頂いたままだった。

車から降り、見事な竹を見上げていると、茅葺の家から出て来たお婆さんが屈んで、邪魔だとばかりに、道の真中の孟宗竹をゴシゴシと切りはじめた。

お婆さんに近づき竹を切らせて欲しいと頼み込んだ所、二つ返事で承知してくれた。

お婆さん曰ク、道に生えた竹は一輪車が通るのに邪魔だとか。

偶々居合の稽古日だったので車のトランクに稽古着と真剣一振りを入れていた。

私は、二尺五寸の真剣の鞘を払い件<くだん>の竹に正対した。

両足をしっかり地面に固定して、上段から右斜め袈裟に刀を振り下ろした。

竹は、「ぼん」と軽やかな音を発し、倒れずそのまま立っていた。

民芸玩具の達磨落しもどきである。手で押して竹は、<バサッ>と音を立てて倒れた。

瞬時、刀が竹の胴を袈裟に抜け、そのときの手の内の感覚は、ゴルフでナイスショットを放ったときのような心地よいものであった。今でもこの手の掌がそれを覚えている。

斬った竹が倒れずにいるのを見てお婆さん、何事が起こったのかとびっくり顔。

寧<むし>ろ、びっくりしたのは刀を振り下ろした私の方だった。

まるで時代劇映画、『眠狂四郎』の竹藪でのワン・シーンを再現したようなものだった。

「これは面白い」

気分は高揚し、全身に力が漲り、二、三步前へ進み、次の竹を袈裟に切り付けた。ところが物打ちは、竹の中心から左へ一寸程喰い込んで止まり、刀は抜けなくなってしまった。

右手で刀の柄を持ち、左手で切り損なった竹を左に押し開くと、<バシバシ>と鳴り、孟宗竹はささくれ、竹藪の方にバサバサッと放物線を描いて倒れた。

打ち込んだとき手首に<ブーン>と痺れるようなショックを受け、手首の芯が痛かった。

以後何本切ってもジャスト・ミートの感触は得られず、刃筋が通っていただろうか、無駄な力が作用して物打に力とスピードが乗らなかったのだと思い直し、何度も挑戦したが駄目で、ササクレだった半殺しの孟宗竹が腰の高さで幾本も残った。

写真の切口を見て今考えると、気持が昂<たかぶ>り冷静さを欠いて左手と右手の力の入れ方、即ち、手の内の握り加減に問題があったようである。

しかし、七本の太い孟宗竹を切ったのだが刀の刃毀<はこぼ>れは全くなかった。余談だが刃毀れ話をひとつ。重信流は、敵が打込できた刀を刃で受け止め、なやす。この場合刃と刃が噛合うので刃毀れはま逃れない。鎧で受けるのは受流すときだけだ。

さて、斬り終って私の頭の中は、切れなかった原因究明でいっぱい。切込みの角度か、力の乗せ方か、と思い巡し乍、刀を鞘に納めようとしたが入らない。

刀身をかざして見ると、「防」と「制」の境目（鑿元から24cm位）辺りから右へ僅かに曲がり、「制」から「殺」にかけて（切っ先から24cm位）左に大きく曲がっていた。

差し当たり、タオルと膝を使って応急処置をした。でも反りが大きく大変困ったものだ。そして一晩経つと曲がりはやや戻り、一週間も過ぎた頃には手入れの所為もあって元に戻った。これこそ、刀が柔軟であることの証なのだと思った次第ある。

もうひとつ、刀の凄さを述べておこう。

東京駅前にある東京中央郵便局近くに、三菱グループが所有する「養和会・三菱道場」があった。道場中央に三菱四代目・岩崎小弥太翁の、「寂然不動」の揮毫額が掲げられ、威厳に満ちた雰囲気には私は緊張した。【寂然不動=ひっそりとして、そして何物にも動じない本来の姿】

昭和61年11月12日(1986)から三日間開催された、武講同窓会主催「居合道練成会」の稽古中事である。（全剣連居合を制定居合と言い、制定居合のときは下緒を外した時代の話）

総指揮は紙本範士九段、主席講師は富ヶ原範士八段、以下長澤正夫・石堂定太郎・小島高昌・草間昭盛・上野貞則・鈴木一といった錚錚<そうそう>たる先生方である。当時五段だった私は、範士、教士の先生65名の中に入れてもらい錬成に加わった。受講者も大物ばかりで、大阪の山口礼一範士八段や、大称一郎・岩田憲一・稲村栄一・佐藤彦四郎・佐藤徳四郎・奥田富蔵先生ら、雲の上の大先生達である。

そんな緊張のなか、2日目の午後、十本目四方切りのとき、私の右斜め前にいた北海道の某先生が四人目の敵に切り付けようと刀を受流しに振り被ろうとした所へ私の物

打ちが<バシッ>と落ちた。当時の解説書には、十本目の「脇構え」や「一重身」の文言はなかった。原因は、相手との間<時間の間・距離の間>が取れなかったのである。

刀と刀がぶつかり合うと時代劇の様にくちやりん>とは鳴らないもので<バシッ>と鈍い音がする。この<バシッ>で稽古は一時中断したが、紙本先生の号令で即座に稽古は再開された。

切り込みの為刀が、頭上から離れるともう途中で止めることは難しいものだ。

休憩時間に北海道の某先生の刀を拝見した所、刀身の中程鎬部分にくっきりと私の打込んだ刀傷が線状に走っていた。力いっぱい振り下ろした私の刀には刃毀れはなかった。剃刀のように髭さえ剃れる鋭利な日本刀を手に、私は日本刀の物凄さを体験している。

この時私は、尿管結石を患い排尿不能。油汗を掻き、痛さをこらえての参加だった。稽古が終りホテルで、結石が出た時の喜びは今も忘れられない。

ここで本論。 模擬刀で居合をしている諸君に申し上げる

模擬刀といえども決して粗末にしてはならない。真剣ではないけれど模擬刀を使って居合を習う以上、模擬刀に対する礼儀と感謝、畏敬の念がなくてはならないと思う。

無涯塾の武士は、模擬刀にたいしても真摯な気持ちで向き合ってもらいたい。

八正道と礼儀

「無涯塾の武士」は、忘れがちな「八正道」を時折思い出して欲しいと思う。

野球でお馴染みの元楽天の監督・野村克也氏は、『勝者の資格』という著書の中で次のように述べている。

「礼儀と恥を知らない男は人間の屑」と、喝破<かっぱ>している。

礼儀は挨拶と共に社会生活を円滑に営む上で大事な基本である。その基本が出来なくて居合道などもっての他である。

礼儀を形で表したものにお辞儀がある。お辞儀をする場合、神前や刀に対しては恭<うやうや>しく、丹田に精を込め、息を静かに吐いて肩の力を抜き、腹の底に畏敬の念を抱いて伏すのである。すると、畏敬の念は形となって表に顕れ、見る人の心を打つのである。軽々しくお辞儀をするは失礼千万この上ない。

先生や先輩、同僚、後輩に対しても然り、心の籠った愛あるお辞儀をしたいものである。要するに孔子の目指す道、即ち「忠恕」<ちゅうじょ>である。忠恕は真心と思いやりの真の愛である。

礼儀について考えればまだまだ身の回りには沢山ある。

貰ったら返す、人の面子をつぶさない、人を傷つけない等であるが、釈迦の実践徳目の八正道<はっしょうどう>注目すれば私達の生き方の基本がそこにあることに気がつく。

- ① 正 見 (しょうけん) = 正しくものを観る
- ② 正 思惟 (しょうしい) = 正しく理<ことわり>を考える
- ③ 正 語 (しょうご) = 正しい言葉を口にする

- ④ 正業（しょうごう）＝正しい行いをする
- ⑤ 正命（しょうみょう）＝正しく心を集中し安定させる
- ⑥ 正精進（しょうしょうじん）＝正しい目的に向かって努力する
- ⑦ 正念（しょうねん）＝正しい念<おもい>で無我無心になる
- ⑧ 正定（しょうじょう）＝正しい生活をする

武蔵の八正道

宮本武蔵は、播磨の国で生を受け、十手の名人だった新免家の養子となる。十三歳の折、新当流の有馬某と勝負して勝ち、二十一歳のとき京の吉岡一門を破り、二十九歳の砌、佐々木小次郎を破るまで六十数度の真剣勝負行ったが一度も負けなかった。

晩年、武蔵は兵法の道を外に求めたが、求める心が兵法の理であり、道であると悟る。

寺山旦中氏によれば、剣聖宮本武蔵も、『兵法を行う法』として次の九つを挙げている。（ ）内は私たちの居合に対する心がけ。

- ① 正しく思うこと（心正しい居合をする）
- ② 道を鍛錬すること（身も心も業も練磨する）
- ③ 諸芸を行うこと（神伝流だけでなく他流も研鑽する）
- ④ 諸職を知ること（伝書を読み、解説書を理解し、他武道も学ぶ）
- ⑤ 判断力をつけること（進んで難事に数多く直面し力を養う）
- ⑥ 目利きになること（居合を通し本質を観る眼、人を観る眼、心を観る眼を養う）
- ⑦ 見えぬところを観ること（何も無い所を見る。間を見る。裏を見る。陰を見る）
- ⑧ 小さなことにも気をつけること（小事は大事に繋がる）
- ⑨ 役に立たぬことはせぬこと（無駄を省け。車のハンドルのあそびは無駄に非ず）

*経済的な無駄は、文化芸術面では無駄とは言わない。

好きな格言

*ここで、「無涯塾の武士」の皆さんに私の好きな格言を紹介する。なにか得るものがあれば幸甚です。

格言1

歩くときは歩く事に徹せよ
 食事するときは食事になりきれ
 お茶を飲む時はお茶になりきれ
 災難に遭うは災難に遭うがよく候
 死ぬときは死ぬがよく候

居合をするときは居合になりきれ

*次も私が理想としているもののひとつである。

格言2

金を失うことは 小さく失う事だ

名誉を失うことは 大きく失う事だ

しかし

やる気を失う事は 全てを失う事である

ウイストン・チャーチル (故・英国首相)

*最後にお金のお話をもう一つ紹介する。

格言3

昔、私の知っている剣道・居合道の大家、某先生は、ある会社の社長をされていた。私は、先生のお言葉で忘れられず、今でもそのことを実践していることがある。

それは、先生曰ク、

「商人にとってお金は武士の刀のようなものである。真の武士は己に刃<やいば>を向けられたときはじめて身を守るため刀を抜く。無闇に刀を抜いて人を脅したり、斬付けたりはしない。商人もまた、お金はふりかかる災難から我身を守るために使うのであって、非道に使ってはならない。それが正しい活きたお金の使い方、活きたお金は決して汚いものではない。お金も剣も正しく使うことだ」であった。

正しく居合道の真髄、『袈裟の一太刀』の精神である。

むすび

塾生の皆さんは、私の先生だと思っております。皆の業を見るとき自分の通ってきた道を思い出し学ぶことが多いのです。業ばかりでなく人間性に於いても教わることが沢山あります。今後とも皆さんのご高配をお願いするものであります。

何度も申しておりますが、**仕事** (収入) と**家庭** (和) そして**居合** (心身練磨) の三本足を大地にしっかりと着けて、娑婆世界の荒波を乗り越えて行きたいと思う。3点支持は強い。滅多には倒れない。この3本足に**文化**を加えると一層味ある人生になろう。

神仏を崇め、礼儀を尊び、家庭を愛し、職場に惚れ、居合に惚れ、塾に道場に惚れ、刀には畏敬の念、そして師を敬い、仲間を思いやり、自分に惚れようではないか。

長々と述べてきたが、文底を覗き見て、「無涯塾」の考えや目指すところはお解かり戴けたことと思います。

但し、このことは決して塾生の皆さんに無理強いするつもりは毛頭ありません。どのように理解されても構いませんが、夫々が己を知り、立派な「無涯塾の武士」でありますよう願っております。

これを以って、「無涯塾」設立 10 周年に当り私の所信と致します。 了

志貴ノ皇子、身祝いに作られた御歌

万葉集第八卷 1418

いはばしる^{たるみ}垂水の上のさ^{わらび}蕨の 萌え出^{いず}る春になりけるかも

海 行 か ば

大伴家持

^{うみゆ}海行かば ^{みず}水漬くかばね

^{やま}山ゆかば ^{くさ}草むすかばね

^{おおきみ}大君の ^へ辺にこそ死^しなめ

かえり^み身はせじ

*補足

「志貴ノ皇子」の和歌は今の気持
「海ゆかば」武士の心意気と思う